

らんぷと口笛



たらどうだろうと漠然と考えただけである。あの時と同じように、それは甘美な体験に思われた。彼は一歩を進めた。しかし、誰かが彼を呼び止める気がして、歩みを止めた。もう一歩踏み出せば、もう後には戻ることはできないのを雄一は予感していた。

雄一はその場でぼんやり立ち尽くしていた。波の音だけが聞こえていた。どのくらいの時間が過ぎただろう。雄一は我に返った。そして、踵を返すと、妻子の眠るテントへと帰って行った。

朝、ポケットベルの音で目がさめた。テントに涼子とアキラの姿はなく、テントを這い出すと、二人は浜で砂の城を作っていた。

公衆電話で病院に電話すると、先輩医師が出て、山村さんが亡くなったことを告げた。死亡時刻はちょうど雄一が夜の海に入っただけというとして、呼び止める声を感じた時刻だった。雄一はまるで山村さんが彼を呼び止めたような気がした。あるいは彼のかわりにあちらの世界へ旅立っていった気がした。

先輩医師はそのことだけを告げると、雄一に予定通り休暇を過ごすようにと言い、そのことは遺族の希望でもあると付け足した。雄一は受話器を握ったまま。頭を下げ、謝意を述べて電話を切った。

売店を出ると、すでに青空が海の上に広がっていた。あと二日優雅な休暇が残っていた。雄一は妻子たちがいる砂浜に向かって歩き出した。

(完)



(1)

三十歳の誕生日はあっけなくやってきた。二十九歳の一年間、これでいよいよ青春も終わりかとあせり暮らしたのが不思議なほど、三十歳がうつむき加減に扉を叩いたとき、ぼくは静かに彼を迎え入れた。

ちょうど三十歳になったその日、晴れきった空の色を吸いこんで青みをおびた桜の花びらがいつせいに鏡川の澄んだ川面に散り吹雪く五重橋あたりを散策し、その帰り、ぼくはスナック『むし槿』の扉を半年ぶりに開けた。

若い頃に、ミスI市の栄冠に輝いたこともある三十代後半のママは、ぼくの顔を見るなり、「あら、久しぶり」と声をかけてきた。

「とうとう駄目だったんだって？」とカウンターの背後の黒塗りの棚からきらきらと室内燈を反射するよく磨きこまれたグラスを取り出しながら、ママが言った。

えりかとの破局のことだなとすぐに気づき、「よく知っているね」とぼくは答えた。

「狭い街ですもの」とママは受け、「あまり深酒しちゃ駄目よ」と釘を刺した。

「あやちゃんは？」ぼくは姿の見えない、以前店にいた子の名を尋ねた。

「お風呂どおりで働いているわ」お風呂どおりとは『槿』のある通りより二筋、東にずれたソープランドの並ぶ通りの呼び名だった。

「え？」とぼくは聞きかえした。

「あっちの方が身入りがいいからって。この頃の若い子の考えることはわからないわ」

ママは叡智と敏のめだつ顔をしてそう言う、「かわりに今はあの子に来てもらってるの」と琥珀色のウイスキーをそそぎながら、恰幅のいい中年男の相手をしているサーファーカットの女の子を顎でさした。「巨大の教育学部の三年生なの。紹介するわ」

ママは、自分のグラスにいれたウイスキーの烏龍茶割りを二センチ程飲み、「美央ちゃん」と客の煙草に燐寸の火を翳^{かき}している女の子を呼んだ。

「はぁーい」と元気のいい返事をし、彼女は中指と人さし指をあざやかに振って、指の股にはさんだ燐寸の炎を消し、灰皿に捨てるのと寄ってきた。

「美央ちゃん、この人が、あなたの会いたがっていたタウン情報誌の表紙のイラストを描いている長島さん。あとよろしくね」と紹介したあと、ママは美央が相手していた中年男の方にうつって行った。

「イラストも素敵だけど、実物のほうがもっと素敵ですね」と美央は薄くなったぼくのグラスにウイスキーをつぎたしながら、言った。

本人に向かって、実物という言葉を使うなんて、今の若い子はしようがないなあと思いつながら、「お世辞のうまい子だ」とこたええると、「お世辞じゃないですよ」と美央は桜色のルージュを淡く塗った唇をとがらせた。どうやら、美央は自分で魅力的だと思ってるしぐさや表情は平凡な印象しか人にあたえず、

気取りを忘れておもわず露呈してしまう地に愛嬌のある女の子のようだった。ちょっと小生意気で、いきのいい子、それが美央の第一印象だった。

朝から降りだした雨が一日中降りやまず、路地じゅうの樋がごくごく喉を鳴らし、どこのお店でも客待ち顔の女達がマニキュアに濡れた指で空のグラスをもてあそんでいる夜だった。『檣』のカウンターに腰をおろし、有線放送から洩れる六十年代アメリカンポップスにほんやり耳を傾けていると、誰もいないと思っていた店の奥から独特のだみ声が聞こえてきた。

声のする方をふりむくと、熟しきって地に落ちる寸前のトマトの色に酒やけた団子鼻の男が、顎の削げた、気の弱そうな目をした青年にご託を述べているのがきこえた。

「お若い、これはわしが人生五十年の経験から得た絶対の真理なんじゃが、女というのは結局、あそこじゃよ。あそこ、あの気持ちよさが女なんじゃ。若いうちは女に心を求める。誠意を求める。しかし、心とはなんだ。人は心、心と騒ぐが、心ほどもろく、ゆらめきやすく、信用のおけないものはない。それにくらべ、体は正直だ。どんなに心の冷たい女でも、その肌は温かく、なやましい。まっ、こんな話、今のおまえさんには中年のいやらしさとしか思えんじやろが、いずれ思い当たるときが来る」

そう言い終わると、男は青年の撫で肩をポンポンと景気よく叩き、立ち上がった。

「ママさん、お勘定」

「四九〇〇円になります」

「四九〇〇円!? フム」

男はよれよれの五千円札を尻ポケットから引つ張りだして皺を伸ばし、カウンターの上面のせ「釣りは
いらぬよ」と出ていった。

「今のは誰？」

出ていった男の団子鼻に風船腹のどっしりとした体躯と態度のせわしなさのアンバランスに興味をおぼ
え、ぼくは男の素性をママにたずねた。

「街はずれの工業団地跡にテントを張っている見世物小屋の団長。毎年、夏の初めのこの時期になると二
週間ほどI市で興行してるのよ」

そう言うとき、ママは残された青年のほうにうつってゆき、交代に美央が自分のグラスを持ってやってきた。

次の日も、『榿』の扉をあけると、昨日の団長が中央の席を占領していて、唾を飛ばしながら大声で何
か論じていた。団長はなめらかに動かしていた唇の動きをとめ、ぼくの方を手でさして、「ママさん、こ
の人にもウイスキーをあげておくれ」とカウンターのなかへ声をかけた。

「何にしましょう」

「何でもいい」と鷹揚に応えたあと、すぐさま「安い奴でいい。安くてもうまい奴を」と団長は訂正した。

言われる前からすでにママは最も安価なウイスキーのボトルを手にしていた。

「アルコールというのは酔えればいいのよ。わざわざ高い金を払って、ほとんどが輸入税の舶来品を飲む
奴の気が知れん」

そうじゃろ、と同意を求めつつ団長はぼくのグラスに最も安価な国産ウイスキーを注ぎ、再び一座の者
に話の続きを喋りはじめた。

グラスを傾けながら聞いていると、どうやら興行でまわる各地の県民性の比較を論じているらしい。か
なり誇張気味ではあるが、団長の体験的県民論は滅法おもしろく、ほろ酔い気分では聞かぬにはびつたりか
くてゆかいな話を手品のごとく次から次へと披露する団長を、ぼくは半ば感嘆、半ば侮蔑の念で見ている。
以来、『榿』の扉を開けるたび、カウンターに団長の赤鼻がともっている、ぼくの姿をみとめると、脇にすわっ
ている客に席をずらせてぼくの席をつくり、まず一杯、そして一杯だけ、ぼくに奢るのだった。

そんなある日、ぼくと美央は団長から見世物小屋への招待を受けた。

見世物小屋の楕円形の大テントはI市郊外の雑草がうっそうと茂る工業団地跡に設営されていた。高度
経済成長期の終わり頃に山を崩して造成されたこの工業団地は、その後の石油ショックなどで買い手がつ
かず、荒れるがままに放置されていたが、最近、エレクトロニクス工場進出の話がもちあがっている、その
話の実現すると、来年の市長選への格好の手みやげとなるため、現市長が誘致に躍起になっているとい
う噂だった。

その草原の果て、切り崩されて代赭色たし。の地肌の露呈した山ぎわに、朱、白、紫の旗を、野をよぎる風

に翻らせて大テントはあった。

小屋は平日にもかかわらず、鼻肩のプロ野球チームに応じた色とりどりの野球帽をかぶった子供と子供に手をひっぱられた母親達で結構ごった返していた。

見世物は背中に瘤のあるらくだ男とか蛇女、侏儒、頭部が虎で胴体が豹の虎豹とか、板垣退助の髭、新選組の近藤勇が締めていたふんどしなど随分いかかわしく、胡散臭いものばかりだった。

ひとわたり展示場を遊覧しおえると、ちょうどショーの始まる時刻だった。

美央はと見まわすと、小屋の入口近くの屋台で買った林檎飴を齧りながら、鯨のペニスの展示台の前で立ちどまっていた。胴体から切り離されて展示台上に寝そべる鯨の巨大なペニスを見つめる美央の顔は『樞』の人工照明の下でアイシャドウをつけているときの夜の大人びた顔とは違い、どこかあどけなさの残る年齢相応の顔だった。

「どうした。ショーが始まるよ」

ぼくは美央に声をかけた。

「はあ」

美央はぼくの顔と鯨のペニスを交互に眺め、なにか言いたそうな唇の形をしたが、途中で断念し、後をついてきた。

中央の土間ではすでに母親と子供たちが何重もの円陣を形成していた。ぼくと美央は円陣の最後列には

いっていった。

ショーは犬たちの曲芸とピエロの手品、口から火を吐く男、蛇使い、カードの数字を当てる馬など子供だましのしろものだった。ぼくはショーの最中になんども欠呻を漏らし、その都度きまじめな表情をした美央に脇腹をつつかれた。

ショーの最後に、右目の周囲を青く、左目の周囲を赤く塗ったららくだ男が登場し、円陣に向かって深々と頭を下げた。つられて母親の何人かが舞台に礼を返した。ぼくは彼女たちの反射的な返礼におもわず苦笑し、再び美央に脇腹をつつかれた。

らくだ男は無言のまま黒と白の縞模様のステッキを小脇に抱え肩をゆすらせながら、一周、二周、三周とゆっくり旋回し、四週目からステッキを宙に振りまわしだした。

ははあ、パントマイムだなと合点し、何度めかの欠呻を噛み殺しつつ、舞台を見ていたが、青年は円を描いて歩くばかりでいっこうに次の動作にうつる気配をみせない。

まさか、これだけの芸じゃないだろうかと不安をおぼえはじめた矢先、青年の唇から哀愁にみちたジプシーの曲が流れだした。

最初、ゆるやかで微かに鳴りはじめた口笛の音は次第にテンポと音量を増し、ぼくの胸の奥にふだんしまいこんでいる感情を揺さぶり、かきたて、わななかせた。悲しみが胸いっぱいにあふれ、もうこれ以上は耐えられないと悲鳴をあげそうになった刹那、口笛の音は天上の楽のように澄みきった浄らかな音とな

り、天幕の中に響きわたった。

その磨ぎ澄んだ口笛の音ですみずみまで洗われたぼくの体は透明に透きとおり、軽くなった身が宙を浮遊しはじめ、やがて手とか肢とか胴や首が漸次大気中に溶けてゆき、ぼくは魂だけの存在となって哭きながら天幕の梁の下の宙を舞った。

気がつくと、口笛の音は消え、ぼくは円陣の最後列に舞いもどっていた。円陣のどの顔も素晴らしい夢をみたあのような晴れやかで爽やかな顔をしていた。

いいものを聴いたとぼくは思った。シヨ一の終わった途端、円陣は崩れ、見物人たちは四散した。

「ちょっと団長に挨拶してくるよ。君も来るかい」ぼくは美央にきいた。

「私は遠慮しとく」

「じゃあ、ちょっと行ってくる」

「行つてらっしゃい。私はそこらをぶらぶらしてるから」と美央は言い、ぼくから離れた。

団長の部屋はすぐにわかった。近藤男のふんどしを展示している場所のまっすぐ奥に、建てつけの悪い木の扉に鮮やかな黄色の蛍光塗料で、団長室と大書してあった。

そのとき、扉が開き、中から鉤鼻の下に貧相なちよび髭を生やした猫背の中年男が人工革の集金鞆を大事そうに抱えて出てきた。男は扉の前に突っ立つぼくに気づくと、一瞬ぎよつとした顔をしたが、すぐすました顔になり、「お先に」と頭をさげ、ぼくほくした足取りで去っていった。

ぼくは男の顔に見覚えのある気がし、男が誰だったか、記憶棚の中をまさぐったが、男に対する情報はひきだせなかった。

男の後姿が視界から消えたのをしおに、ぼくは思い出すことを諦め、団長室の木の扉をノックした。

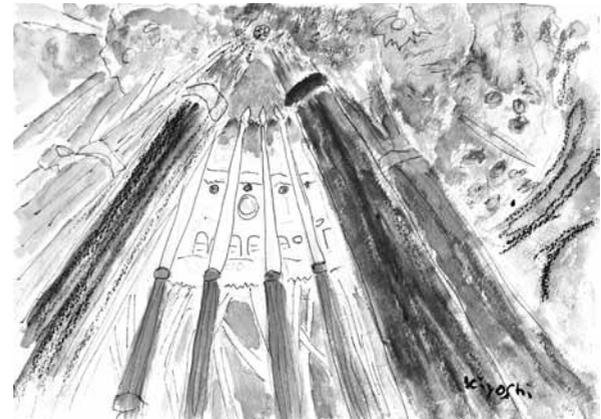
「どうぞ」という返事があり、部屋に入っていくと、団長は中華料理店でよく見かける大きな円卓の上にとっかと足をのせ、今にもシャツのボタンのはじけ飛びそうな太鼓腹に双手を組んで深々と椅子に身を沈め、広沢虎造の浪曲のテープにあわせて喉を震わせていた。

「やあよく来てくれた」

団長はテープを止め、椅子から立ち上がって、応接セットの片割れらしきソファアをぼくにすすめた。ソファアには先刻の男の体温が残っている、ぬうとした生温かな感触がズボン越しに尻に伝わった。不意にぼくはあの男は春帆楼の主人だと思い出した。

「この壺はいくらすると思っ？」

ぼくがソファアに腰をおろすや否や、団長は円卓の上の赤茶けた地肌に黒いにがりが斑らに点在する壺を指さして訊いた。



陶器の趣味などもちあわせていない。ぼくは首を捻った。

「さっきの男は五万円を要求した。おまえさんも、きつとそこらで顔をあわしたじゃろ」

団長は満足そうにソファに沈みこんで言った。

「春帆楼の主人ですね」

「昨日、たまたま奴さんの店に夕飯を食いに行つてな。厠横の手洗い場で野の花を投げこんでいるこの壺をみつけたという訳だ。わしが壺を集めているので譲ってくれんかと言ったら、二束三文で買ったくせに十万円でならとふっかけおる」

「十万円?!」

ぼくは壺を手を取った。ためつすがめつ見たが、とてもそんなにするものには見えなかった。

「この壺が十万円ですか」

「なあに、はったりじゃよ。はったり。無論、そんなはつたりにひつかかるわしじゃない。わしは断つた。すると、奴さんすぐさま手を擦りながら六万円と値を下げてきた。それから打々発止ちよちよほしのかけひきの末、結局四万円で手打つたんじゃが、ところで、この壺、おまえさんの目にはいくらぐらいのものに見える?」

ぼくはあてずっぽうを言うしかなかった。

「五千円ぐらいですか……」

「いい目をしているな。壺の出来からいえば、そんなもんじゃろ」

上機嫌な調子で、団長はぼくの目を誉めた。怪訝な顔をしているぼくに、団長は壺の作者が人間国宝の島岡清之であり、その作品だというだけで、若くてまだ未熟な頃のこの壺でも百万円は下るまいと説明した。「百万円ですか?」と思わず、ぼくは聞きかえした。

団長はうなずき、「無論、奴さんはそんなことなど知るはずもない。今頃は店に帰つて、二束三文の壺を四万円で売りつけた自分のすぐ腕を女房、従業員相手に得々と喋っていることじゃろ。幸せな奴じゃよ」と笑った。

そのあと長々と自分がいかに陶器の目利きであるかを自慢したあと、話の終わりについでのように見世物小屋のポスター作成をぼくに依頼した。

ぼくがタウン情報誌の表紙イラストを担当しているのを承知していて、報酬ゼロでぼくの好意にすぎるといふ虫のいい申し出であったが、子供の頃からサーカスや旅芸人、ジプシーなどのボヘミアンに憧憬を抱いていたぼくは取材のための楽屋への出入り自由を条件に申し出を承諾した。

団長の部屋を辞したのち、テントを出、美央を捜した。テントの裾のかけに、胸から上だけのぞかせて美央はいた。

近づいていくと、彼女は目のまわりの化粧を落としたらくだ男と楽しそうに喋っていた。ぼくに気づいたらくだ男の表情がこわばり、らくだ男の表情の変化に驚いた美央がふりむいた。

「団長への挨拶は終わった?」

美央は屈託のない声でそう聞いた。

「ああ」と自分でもわかる程度の不機嫌さの混じった声でぼくは答えた。

「紹介するわ。こちら、神崎さん」

「長島です。君の口笛は素晴らしかった」

「ねえ、私たち、これから海を見に行くんだけど、あなたも行かない？」

ふと思いついたように、美央が神崎を誘った。

「いいですか。お邪魔じゃないですか」

神崎は思わず目を輝かせたのち、ぼくをうかがい見た。

「いいとも」とぼくは仕方なく鷹揚に答えた。

「じゃあ、決まり。そうしましょう」

派手な喜びようで、美央は神崎の腕をとった。美央に腕をとられながら、神崎は気の毒そうな目をぼくにむけた。

青い車体のプレリユードで三十分程走ると、幾筋もの波が銀鱗状に連なる渚に着いた。車を停めるやいなや、美央は助手席から飛び出し、砂浜を波打ち際へ駆けおりていった。白いサンダルが目眩しかった。

ぼくと神崎は車を降り、車体に寄り添うようにして暮色を濃くする海を眺めた。

瀬戸内の大小の島々は海ぎわがぼつと霞んで、まるで島全体が海の上に数メートル浮いているようにみ

える。その島々のかなたに四国の山なみが雲と競いつらなっている。

昼間は透明に近い水色、青緑、青、濃紺と水平線へ遠ざかるにつれ、色を濃くする海も今は群青の上から一刷毛、黒の絵具を塗り重ねた色となり、残照に白く輝く釣り舟を鏤ちりばめめている。

目を浜辺に転じると、波打ち際で素足の美央が白い波頭と追いかけてっこをしている。美央がかかるたび、渚の砂は跳ね、夕映えの海は笑いさざめく。

「若さってのは素晴らしいですね」

「君はいくつ？」

神崎の言い様がおかしくて、ぼくは彼の齢をきいた。

「二十四歳です」

神崎は何のてらいもなくそう答えた。

「今度、お部屋に遊びに行つていいですか？」

「……」

「美央さんから長島さんはイラストや小説を書くと聞いたものですから」

「興味があるの？」

「はこ」

「明日迎えに行くよ」

ぼくはこの素直な青年がしだいに好きになりだしていた。

「すみません」

「ねえ、なにしてるの。冷たくて気持ちいいわよ」

いつのまに入っただのか、水の中から美央が声を張りあげた。

ハァーイと神崎は返事をし、左肩を傾けながら、砂浜の砂を蹴散らしてかけおりにいった。神崎が目の下の砂に残した左足のみが深く掘れた足跡をみながら、ぼくはカメラに火をつけた。

砂まみれの蟹が足跡の窪みから這いでて視界の右上に消えていった。しばらく視線を固定して待ったが、二匹目の蟹は出て来ず、時だけが音もなく窪みの上を通り過ぎていった。

ぼくは煙草を捨て靴底で踏み消すと、車に鍵をかけ、二人の戯れる海辺におりていった。

(2)

あくる日、神崎を迎えにいくと、テント前の原っぱで団長と神崎が何事か言い争っていた。まわりを団員たちが心配そうに取りかこみ、神崎は曲がった背中をましますかがめ、団長の鼻は怒りのために今にも茹であがりそうだった。

車を降りて、集団に近づいていくと、団長は激した表情をやわらげ、大きな手をぼくに差し出した。

「どうもお忙しいところを申し訳ないですなあ。こいつがなにやらわがままなお願いをしたそうで……」

咄嗟にぼくは事態を悟った。

「いえ、こちらこそ。無理に取材を頼んで」

「取材?! と言いますと例の……」

ぼくは首を縦に振った。

「彼の口笛に魅せられたので、ポスターのモデルになってもらおうかと思って」

「あなたのアパートで?」

「ぼくは仕事はいつもアパートです」

「なるほど」

どうやら団長は納得したらしく、「それならそうと早く言えばいいんだ」と上機嫌で神崎を叱り、

「まっ、よろしく頼みます」と深々と頭を垂れた。

「団長は私たち団員が外の世界の人間と付き合うのを嫌うんです」

見世物小屋の大テントが見えなくなる地点まで遠ざかった車の助手席で、神崎が言った。

「どうして?」

カーラジオからはビーチ・ボーイズの「サーフィン・USA」が流れている。夏になると、どの局もこ